

ESGAR(European Society of Gastrointestinal and Abdominal Radiology) 印象記

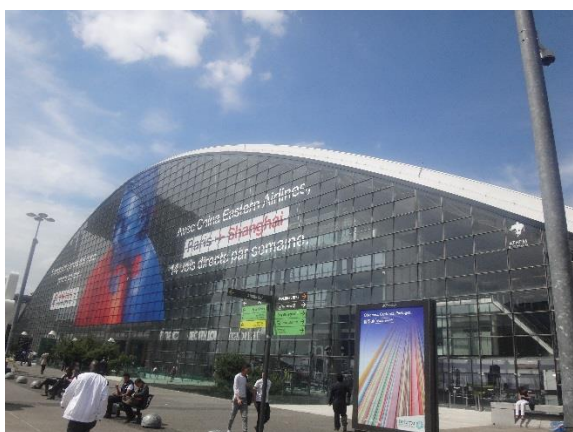
財前 翠

第 26 回 欧州腹部放射線学会(ESGAR)は、2015/6/9-12 の 4 日間の日程で、フランス/パリの La Défense において開催されました。今回私は幸運にも(というより恐れ多くも)、久能先生・廣瀬先生にお供させていただく機会に恵まれました。

日本では 6 月上旬に梅雨入りしたばかりの鬱々とした天気で、出発前は遅延や欠航など若干の心配もありましたが、無事晴天のパリに到着できました。旅程はどの日をとっても快晴でした。例えば久能先生・廣瀬先生のコンビは晴れが多いとのこと、今回もまさに消化器グループの「晴れパワー」が発揮されたようです。

この La Défense はパリ近郊にある都市開発地区であり、パリの歴史的建築物とはまた異なる、高層ビルや大型施設などで近代的な景観が印象的な地区です。

今回の ESGAR は、メトロ 1 号線終点の La Défense-Grande arche 駅からすぐ目に入る、半円形のユニークな建物：国立産業技術センター(CNIT)の一角で行われました。近くには四角い箱状のオブジェが印象的でした。この四角い建物、後で調べると、「新凱旋門」として韓国の彫刻家によって作られたとのこと。



会場の国立産業技術センター：CNIT



隣には、新凱旋門

さて、本題の学会に関してレポートさせていただきます。

会場は大きく展示と学会場に分かれており、展示のブースには電子ポスターや医療機器、そして閲覧用コンピュータなどが並べてありました。思っていたよりすっきりした配置をしていました。



展示用ブース

今回一番のニュースとして、廣瀬先生が見事、ESGAR で **Certificate of merit** を受賞されたことを報告申し上げます。受賞報告の前で証明写真と同じ角度の写真を撮影させていただきました。すると、廣瀬先生に後光が差しているではありませんか (!!)。撮影した時、撮り手の財前は「すごい! 」と、つい興奮してしまいました。帰国して冷静に確認すると背景のパネルの反射のようにも認められますが、いえいえ、まさしく廣瀬先生は他者を圧倒する神々しいオーラを纏っていらっしやったことを証言いたします。



ESGAR TOP 20 の展示

学会会場では **regident** 向けの教育講演もありました。

腹部の症例検討形式で、腹壁損傷、胆石イレウス、肝膿瘍、**SMA** 損傷などの基本的疾患についてや肝内門脈ガスの鑑別疾患などについて扱っていましたが、司会者と回答者、解説者の3者を交えての **discussion** は白熱しており、いつの間にか私も熱中して手を握りながら聞いていました。



ポスター会場・会場内。展示用ブース横から入ると、会場でした。

今回の教育講演の内容が腹部救急であったこともあり、画像を客観的に見るとともに日常臨床に則した画像の考え方・鑑別の挙げ方がいかに大事かを再確認させられました。**SMA** 損傷の症例では、回答者は「まず主治医に急いで **IVRist** を呼ぶように伝える」と所見以外にまで言及あり、会場からも同意の声があがっていました。

また今回、学会の後、先輩方と一緒にフランスの夜を体験してきました！

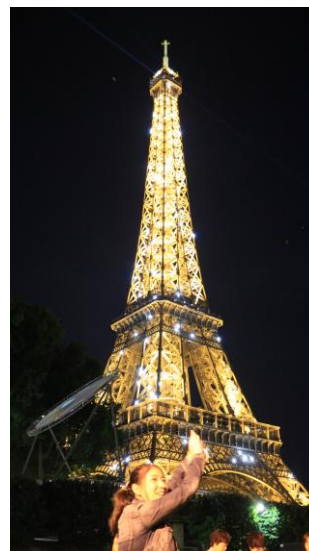
ムーランルージュは女性の肌の露出がすごいと聞いていたこともあり、今までどうしても「大人の」エンターテイメントという思い込みが強かったのですが、実際に鑑賞してみて、なるほどなるほど。豪華ですが身体のなだらかな曲線を隠してしまわないゴージャスな衣装で、息のあったダンスに美しい歌、さらには大水槽に蛇、馬など動物もでてきて、まさに夢のひとつでした。安陪先生や田中先生が「あれは芸術」と仰っていた意味がやっと納得できました。

また、フランスの「**La Grande Dame de Fer**(鉄の女)」と評されるエッフェル塔、昼間のしなやかで繊細な鉄のラインも美しいですが、皆様ご存じの如く、夜には光を纏い、昼とは異なる華やかな姿を呈します。特に1時間に1回のシャンパンフラッシュは、まさに言

葉通り、黄金色のシャンパンに泡がはじけるような、まるで宝石を散りばめたような美しさです。写真で伝わりますでしょうか？



ムーランルージュ



エッフェル塔のシャンパンフラッシュ前

初めての国際学会、ドキドキしながら先輩方の後を挙動不審に付いて回っていましたが、久能先生も廣瀬先生も堂々と大人の余裕をもって行動されており、近くて遠い距離を実感する度に少しほろ苦い思いも感じました。今回、このような貴重な経験をさせていただいたことに感謝するとともに、是非またご一緒できるチャンスがありますようにと願いつつ、実現にむけて今後もより一層精進していきたいと思えます。

内田政史教授には、二人しかいない医療センターで業務に穴をあけるにも関わらずこのような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

また、今回の研修をサポートしてくださった、池原先生、久原先生、また安陪教授はじめ医局の先生方、同門の先生方に深くお礼を申し上げます。